

新生会の医療に係わって二十五年ほど経つ。ここで学んだことから、論壇のテーマは天寿(自然死)とした。

一人の医師として、目の前にいる患者さんのことなら長寿を願う。しかし、国全体という視点で見ると、予想を遙かに超えるスピードで進行する少子高齢化が、日本を高齢者にとって住みにくい国にしている。

フィンランドでは早く仕事を辞めて豊かな老後生活を送りたいという希望が中期から強く、なるべく長く働くよう政府が対策を練っているという。日本は豊かな老後のカケラもなく、生活を維持するために働かざるを得ない高齢者も多い。なぜこんな国になったのか。その原因は、日本人が農耕民族であることなど幾つもあるが、ここでは『先見性を欠いた健康施策』という要因を挙げたい。

健康診断、例えばメタボ対策が悲惨な高齢者を増産しているという考えである。日本は国を挙げて膨大な検診費用と保健師のマンパワーをつぎ込んで成人病・生活習慣病対策に取り組んできた。その結果、脳卒中や心筋梗塞は減ったか?

中期からいわゆる成人病対策をすると、確かに初老期の成人病は減

った。しかし、予防により寿命が延び、高齢期に発症する患者が著しく増えた。予防に取り組みれば取り組むほど、発症年齢は高齢化した。患者総数は増えたのである。しかも医療が進歩したので、例えば脳卒中を発症しても死に至ることはなく、障害を抱えて生き残ることになる。予防に金やマンパワーをつぎ込むほど、そして医療が進歩するほど平均寿命が延び、幾つもの疾患・障害を抱えた高齢者が増えるという結果を

### 論壇

## 長寿から天寿へのパラダイムシフト

〜豊かな老後をめざして〜

群馬大学医学部保健学科教授 山口晴保

生んだ。これが医療費を押し上げ、要介護者を増やし、年金受給者を増大させている。

八十歳で生涯を終えれば年金をもらう期間は十五年だが、九十五歳まで生きると倍の三十年間となる。つまり、平均寿命が短くなればその分年金を増額できる計算である。逆にさらに長寿化が進めば働く世代にしわ寄せがいくか、年金が減額される。

『ガリヴァー旅行記』には、不死の国「ラグナグ王国」が出てくる。長生きできてどんなに素晴らしい国

かとガリヴァーが訪ねてみると、そこには老いたまま死ねないでいる苦渋に満ちた老人達がいた。長生きは、必ずしも幸福ではない。大切なことは、如何に長く生きるかではなく、如何に豊かな老後を送るかである。

医療費二十年分以上にも相当する八百兆円を越える巨額な赤字を抱える我が国が、このまま長寿化を促進する政策を続けられれば、財政破綻した夕張市の二の舞状態となり、高齢者

には医療もケアもない悲惨な国になることは容易に想定できる。少子高齢化はこれまで厚労省の予想を遙かに超えるスピードで進行した。これ

からも予防や新しい医療技術開発を続けられ、人間の死因は次々と奪われ、予想を超える長寿(不死)社会Ⅱラグナグ王国になる。まずは高齢者が安心して暮らせる社会づくりを算を割くべきであろう。

筆者はアルツハイマー型認知症(アルツハイマー病)の根本的治療薬開発を夢見て研究を続けてきた研

究者である。しかし、この薬が実用化されアルツハイマー型認知症が制圧されれば、主要な死因の一つが奪われることになる。アルツハイマー型認知症は最後には死ぬ病気であり、米国の死因の四位といわれる。益々病氣・障害を抱えた高齢者が増えるのである。

オランダでは、子育てが終わると家を売り、小さな小屋のような家に住み、家庭菜園やヨットを楽しんでいる高齢者を多数見かけた。日本の高齢者は、やりたいこともガマンして、晩年にかかる医療・介護費と葬式代のために預金し、慎ましい老後を送る。

「健康寿命を延ばしつつ、寿命は延ばさない」ことが、高齢者の医療費・介護費総額を減らし、年金額を増やす。例えば介護が必要な高齢者が今の半分になれば、一人あたりの単価を二倍にしても、国全体の介護費用総額は伸びない!そして、介護職の給料が二倍になり、介護職を目指す人材が増え、質の高い介護が提供され、豊かな老後に結びつく。

長寿から天寿へのパラダイムシフト(価値観の転換)により、高齢者介護の問題が一挙に解決できるのである。心身共に豊かな老後を実現できる国に日本を変えよう。